

【作 品】



*My Felt Work for 10 Years*

赤澤 結花

AKAZAWA, Yuka



本の記憶 -a book was burned- 280×82 c m wool 100% (中 : nylon 100%)  
JAPAN CREATION 2003 テキスタイルコンテスト グランプリ (経済産業大臣賞) 受賞



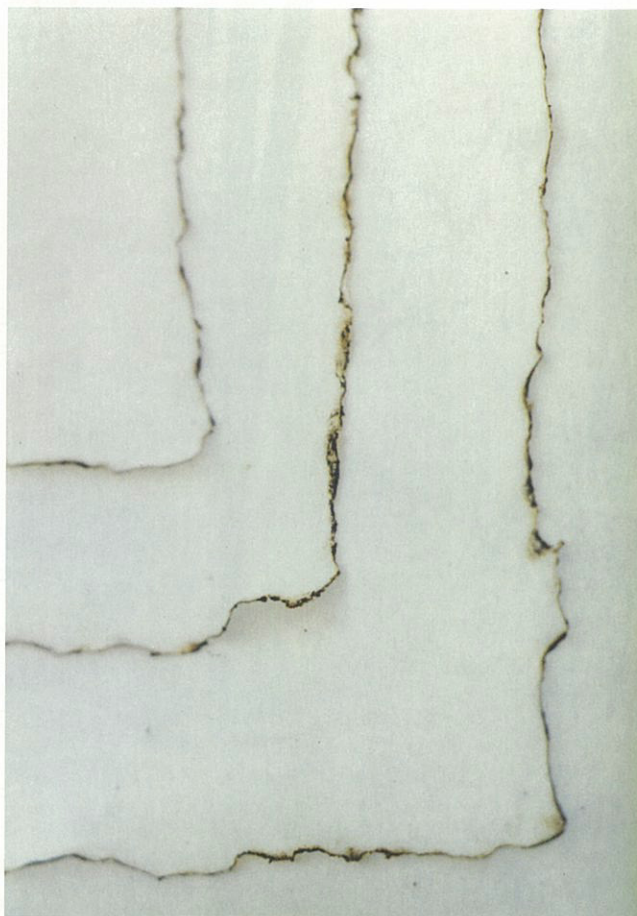
「本の記憶」 -a book was burned-

Design

最初のイメージは、焼け残った本のページ。それをずらすことで、単純な繰り返しによるミニマムなデザインが出来上がる。この作品を作るまでは薄く透けるようなフェルトばかり制作していた。そろそろフェルトに厚みが欲しくなっていた頃だった。ウール本来の暖かみを出すために、ナチュラルな羊毛を探して、辿り着いたのはスペインメリノ。クリーム色がかった自然な色合いは書物の少し古ぼけた感じにぴったりと符合した。

Process

ナイロンチュールにウールラップをひだ状にニードルパンチで仮留めしフェルティング。フェルトの縁はハンドゴテで焼く。







無題 Untitled 208×50 cm wool 100% (一部ラメ糸使用)  
1992 THE INTERNATIONAL TEXTILE DESIGNCONTEST 優秀賞、アイデアヴィエラ賞 受賞



## 「無題」 (Untitled)

### Design

フェルトは不織布という点で、和紙と似ている\_\_という単純な発想により和紙のようなフェルトを作ることを見つけた。和紙は極く薄いものから、ぼってりと厚いものまで様々な種類がある。その頃ハンドメイドのフェルトは厚いものが多かったもので、陽に透けるくらい薄い和紙のイメージをフェルトで表現してみる事にした。所々、自然と穴が開いてもそれがかえって和紙らしさを強調する。ただ白だけでも良かったが、アクセントをつけるために、グレーのコリデール種（羊毛）そのままの色を使用し、和紙を漉いて墨を流したような雰囲気を出した。

### Process

経緯糸にウール10番単糸を使用し、大きく間隔をあけて格子状の土台布を織り、それを薄くウールで挟み、フェルティング。







ローズマリー Rosemary 150×80cm wool 80% silk 20% (土台: nylon 100%)  
1998 東京テキスタイルコンテスト 佳作



## 「ローズマリー」 (Rosemary)

### Design

樹皮の様な雰囲気を持ったフェルトをイメージしながらも、とにかく、透けるほど薄く軽いフェルトを作りたいかった。レースの様なフェルト。フェルトの牧歌的な素朴さよりも、どこかエレガントさが感じられるようなフェルト。そこで、ウールだけでなく、天然繊維としては、ウールと相性の良いシルクを使うことにした。土台のナイロンチュールをわざと見せることで、より透け感が出、シルクオーガンジーでひだをつけ、シルクスライバーをフェルトの表面に出す事によって、不思議と樹皮の感じを持ったフェルトが出来上がった。

### Process

土台のナイロンチュールにシルクオーガンジーをテープ状に裂いて一度丸めてシワにしたものと、ウール、シルクスライバーをストライプの様に適当な間隔で並べ、ニードルパンチで所々仮留めしてから、フェルティング。







アイスランド Iceland 230×110 c m wool 100% (土台 : nylon 100%) 1997 制作



## 「アイスランド」 (Iceland)

### Design

空に浮かぶ雲をそのまま布にしたらかんな感じ—というイメージ。出来上がった布を見ているうちにだんだん流氷のように見えてきて、いつの間にかタイトルはアイスランドになっていた。ウールラップの厚みを所々変えることによって、透け方も微妙に変化して雲の水蒸気らしい感じに近づいた。ウールとウールの隙間にナイロンチュールの筋を作ったことで、遠目には白い塊がたくさん浮かんで見える。布としてのインパクトにはかけるかもしれない。ただ、優しく漂うような、主張しないのも雲らしく思える。

### Process

土台のナイロンチュールにウールラップの塊を厚さを変えて並べ、ニードルパンチで所々仮留めしてから、フェルティング。アクセントに一部シルクスライバーとナチュラルグレーのウールスライバーを使用。





フェルトの歴史は、5000 年以上である。毛織物が織られるずっと以前から生活に利用されてきた。不織布を作る手段として、これほど長く続いているものは他に類をみない。そして誰でも簡単に作ることができる。小さな子供でもフェルトのボールや布片なら短時間で形になるのだ。羊毛とアルカリ溶液があれば、あとは摩擦などの力を加えるだけで、羊毛特有の縮絨がはじまる。立体から布まで、その自由さはまるで粘土のようである。

フェルトにこだわって、作品を制作するようになってから10数年がたった。「フェルトは厚くてしっかりしたもの」というイメージをどこか変えてみたかった。透けるような薄いフェルトを作りたいことを思い立ってから、フェルトに限りなく様々な可能性が見えてきた。

一見しっかりとしたフェルトに見えても、衣服になると折り曲げに弱く、摩擦にも弱い。薄くすればするほど、穴があいてしまう。中間になにかを挟めば、その耐久性も増すのではないかと考え、素材を探して行き着いたのがナイロンチュールだった。ウールと相性の良い柔らかさと伸縮性、そしてある程度の強度を持ったナイロンチュールに出会い、薄く、軽く、透けるフェルトが思い通りに制作できるようになった。

しかし最近では、ある程度の厚みを持ち、羊毛本来のぬくもりを生かした作品を制作するようになってきた。ただ、この10数年で一貫して言えることは、フェルティングという技法を使いながら制作してきたのは、「布」だったということだ。「布」は生活に欠くことのできない存在であり、ファッションにも通じるものである。これからも、その「布」という形にこだわりながらフェルト制作の新たな可能性を追究していきたい。